

# 湖東三山百濟寺に秘められた 北緯35・1度線上のノスタルジア



政治文化の中心が、まだ大和の飛鳥にあったころ。

渡来文化で華やぐ湖東に、

いちはやく百濟人のための寺が誕生した。

それが、百濟ひゃくさいの国名を日本ではじめて冠した百濟寺ひゃくさいいじ。

寺が位置する北緯35・1度線をたどっていくと、

飛鳥時代の百濟僧たちが祖国に想いをはせた

望郷線ぼんきょうせんが浮かび上がります。

大わらじを吊す仁王門。重厚な石垣に覆われたスケールの大きい参道は、寺院というよりまさに山城。



飛鳥時代、渡来系の人々が多くいた湖東の様子がよくわかる。なかでも依智秦氏<sup>えちあはた</sup>一族は有名で、百済寺の創建にも深く関わっていたと思われる。京都でも、同じ渡来系の秦氏<sup>あはた</sup>が一族の氏寺(広隆寺の前身)を建てたのが六〇三年とされている。僧・慧慈は百済国王の命を受けて来日し、若い太子と親密な師弟関係にあった。その師弟が創建する寺である。日本で初めて百済の名を冠するにふさわしかったのだらう。

### 観勒と百済寺の意外な関係

その時代、仏教のほか医学、易、暦も百済から日本に伝来した。六〇二年、百済僧の観勒<sup>かんろく</sup>が暦本・天文・地理・兵術・方術(仙人術)の書をはじめ

を「百済望郷線」と名づけ、独自の仮説を立てていると聞きおよんだ。「百済望郷線」とは謎めく言葉、これぞ近江の不思議ではないかとさっそく寺を訪ねた。

### 近江に飛鳥文化を伝える百済寺

百済寺は六〇六年、聖徳太子とその師・慧慈<sup>えじ</sup>が創建したとされている。飛鳥時代の寺として近江最古級といわれるが、近江どころか、その時代といえば、わが国初の本格寺院である飛鳥寺<sup>あすか</sup>が明日香村に完成(五九六年)してまもない頃、焼失する前の法隆寺でさえ、創建六〇七年といわれているのだ。

「百済寺縁起」はこのように伝えている。聖徳太子と彼の仏教の師であった渡来僧・慧慈が飛鳥から近江湖東の地を訪れると、そこには先進技術と文化が拓かれた土地と家が広がり、衣装や風俗の異なる人々がいる。「あなた方はどこからきたのか」とたずねると「ハクサイ(百済)」と答えた…。

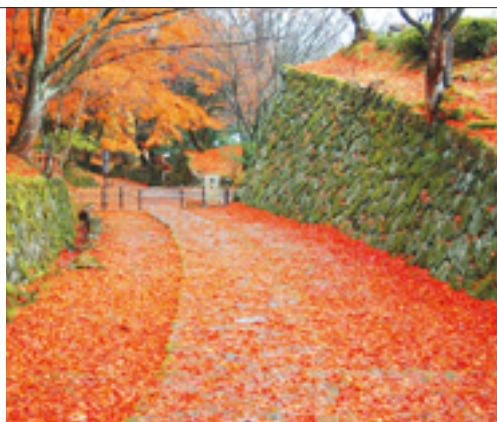


国道307号から百済寺のある山並を眺める。平安末期から鎌倉、室町期にかけて「湖東の小叡山」と称されておおいに隆盛した。写真提供/百済寺

※1 度数表示による。度・分で表せば35度07分。

百済寺<sup>ひやくさいじ</sup>は、紅葉で名高い湖東三山の一つである。三山中もつとも南にあるが、少し奥まった山寺なので、まだ訪れたことのない方もいるかもしれない。中世には僧堂一千坊が四つ谷を埋め尽くし、「まさに地上の天国」(宣教師ルイス・フロイス)と絶賛されたが、信長の焼き討ちに遭い、壮大な僧堂と記録類が灰燼<sup>はいじん</sup>に帰したことが惜しまれてならない。

その百済寺の当代住職・濱中亮明氏が、寺の位置する北緯35°1度線



苔むした石垣と紅葉のコントラストが美しい。百済寺境内には中世の雰囲気が残っている。

めて日本に持ち込んだことは日本史年表にも登場する。これが日本で用いられた最初の暦本であり、また日本での天文事始めでもある。<sup>※2</sup>その観勒が、百済寺の僧として、近江にしばらく住んでいたことは案外知られていない。百済寺の創建は、彼が来日して四年後にあたる。慧慈は太子の師として、完成した飛鳥寺にはじめて入寺した僧であり、百済から最新の学問を携えてやってきた観勒もまた太子の師。これらから推測するに、太子と慧慈が寺創建にあたっての助言を得ようと、暦や天文・地理の大家である観勒を近江に派遣したとも考えられる。そして近江にやってきた彼は、百済寺のためにどんなアドバイスをしたのだろうか。

※2 日本人が発見した小惑星に「観勒(Kanroku)」と命名されたものがあるが、これは観勒が日本の天文学の祖とされることになむ。

長い石段を上り詰めた先に、本堂(重要文化財)が空中楼閣のように現れる。秘仏本尊はここにおられる。現本堂は築360年以上経過。





本坊喜見院の庭園。ここから庭園の頂をめざすと遠望台があり「百済望郷線」を体感できる。



Profile 文 ● 黒田正子(くろだまさこ)

編集者・エッセイスト。京都人も知っていないそうで知らない身近な「不思議」を追跡する『京都の不思議』『京都の不思議II』を出版。著書はほかに『京都語源案内』『それは京都ではじまった』(いずれも光村推古書院)など。

※3 奈良の仏像写真家・小川光三氏が40年前から提唱する「太陽の道」。度・分で表せば34度32分。

たときから、住職はこの北緯35・1度線を「百済望郷線」(ベクチェ・ノスタルジア・ライン)と名づけ、訪れる人々に紹介している。

夕日の向こうに百済国を偲んだ人々

そういえば、大和奈良でも似たようなことがいわれている。卑弥呼の墓との説がある箸墓古墳から、東の方向に元伊勢(と檜原神社、三輪山、伊勢斎宮跡は同一緯度(北緯34・5度)上に並ぶのだ。お彼岸に箸墓に立てば、三輪山の頂上から日が昇り、その彼方、箸墓から七〇キロの地に伊勢斎宮跡があるという。大和平野に引かれた線が東に向かう朝日の道なら、百済寺から湖東平野を貫くのは西の夕日に向かう道である。

しかし地図も磁石もない古代に、いったいどのようにつけて地図の同一緯度に並ぶ地点を知ることができたのだろう。緯度という考え方は、当然古代にはない。が、天文観測は古代中国では紀元前から行われていた。夜空に北極星を見て、方位を求めたり自分の位置を決めたりする技術はすでにあり、観測はそれを伝授する立場にあった。

北極星を見上げる角度が同じであ

れば、東西一直線の地点、つまり地図上の同一緯度ということができる。祖国を遠く離れても、祖国で見慣れていた北極星と同じ仰角で北極星が眺められる場所を異国に見つければ、その土地に縁を感じるのには自然なことだ。それが百済寺をこの地に創建した理由であれば、北緯35・1度の「百済望郷線」は望郷の涙でにじんだことだろう。

はじめは偶然かと思ったという。しかし住職は次第に、これは必然ではないか、寺造営の際に計算されていたのではないかと思いついた。なぜなら、ここに住んでいた僧、観勒は日本に暦や天文・地理の書をもたらした第一人者である。百済寺を建てるための選地と方位決定に関与したであろう彼は、自分の祖国がどの方角にあるかを知っていたはずだ。それに気づい

### 北緯35・1度の百済望郷線をたどる

ては熱田神宮、これらがほぼ同一線に並ぶのだ。「ps」

寺の遠望台から湖東平野を一望すると、なるほど春秋の彼岸中日にはちよつと真西、つまりこの線上にある比叡山(飛鳥時代、延暦寺はまだない)に夕日が沈む。その夕日の遥か向こうに、祖国百済の地を偲ぶことができ

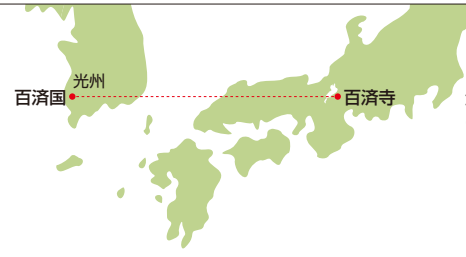


百済寺遠望台より望む北緯35.1度線上の落日(写真上)。手前の屋根は本坊。比叡の山並と夕日、手前に太郎坊、その彼方にかつての百済国はあった。写真下は百済寺遠望台の案内板より(一部画像加工)。

### 謎学サプリ 「くだらじ」でなくなぜ「ひゃくさいじ」?

百済を「くだら」と読む日本式の読み方は、百済寺が創建された飛鳥時代にはまだなかった。当時の百済人の発音「ハクサイ」から、百済寺は1400年以上一貫して「ひゃくさいじ」と呼ばれ、現在は町名も百済寺(ひゃくさいじ)町。

なお、奈良県広陵町にある百済寺は「くだらじ」と呼ばれ、同じく地名も「くだら」。奈良大安寺の前身で日本初の官寺であった百済大寺も「くだら」と読む。「くだら」の読み方は、百済滅亡(660年)後、天智天皇が日本に多くの百済人を受け入れて以降だと推定されている。百済人が用いた「クンナラ」(大きい国)が語源との説がある。(資料提供=百済寺)



北緯35.1度をたどると、このようになる。この不思議は偶然だろうか。

これは偶然の配置か、それとも必然か? 北緯35.1度に並ぶ百済寺、比叡山、百済国...